

金



www.columnland.net

金色の別れ

「最近顔色が悪いよ？大丈夫かい？」

ここ最近の冷え込みのせいか、仲間達の数人は顔色が悪い。そのうちの一人は僕の親友だった。彼は何でも知っていて、とても頼りがいがある。春一番の中でも、夏の嵐の中でも、彼は仲間を励まし、勇気づけてくれた。そんな彼が今ではとても弱弱しく見える。

「もう、俺は長くないって事だろう。」

その言葉を聞いた時、僕は次の言葉を見つけられずにいた。でも彼の言った事はきっと自分にも当てはまることで、とても怖くなった。僕自身それを予感していた。だからこんな質問をしたのだ。

「それは、『死ぬ』って事？」

「多分そうさ。心のどこかで分かっているのさ。お前もそうだろう？」

「俺たち、また会えるのかな・・・。離れ離れになっちゃうんだろ？そんなの嫌だよ・・・。」

「大丈夫。会えるさ。俺はもうすぐ死ぬかもしれない。でも、それは大地に帰るって事さ。だから巡って、巡って、ここに帰って来られるさ。」

「僕もここへ戻って来られるといいな。そうしたら楽しいだろうな。」

「俺達ってさ、花みたいに綺麗じゃないし、虫に食われたりして辛いことが多いけどさ——」

僕は無言で頷く。彼の言葉を聞き逃さないように、じつと耳を傾けた。

「俺にはたくさん仲間がいて、そして俺たちがいるから、みんなが生きているんだ。みんな空気を吸って、ご飯が食べられて、綺麗な花を見られる。みんなが繋がるんだ。だから、俺は嬉しい。仲間達を誇りに思うよ。」

日を追うごとに気温は下がり続け、僕も、僕の仲間達も皆顔色が悪くなった。そして、

——夕日に照らされた僕は、金色に輝いていた——

「そろそろ時間みたいだ。」

「そうか・・・行っちゃうのか。君と一緒にすごく楽しかった・・・ありがとう。」

「それは俺の台詞さ。どうもありがとう・・・楽しかったぜ。じゃあな・・・。」

それは、木々が金色に輝く季節——

冠婚葬祭関係物語

花嫁が投げたブーケが鮮やかな放物線を描き、同じく鮮やかな装いの女性達の中に消えていった。

隣の新郎は照れたような笑みを見せ、控え目に手を振り続ける。そしてふたりを乗せた車は、軽やかに発進して行った…。

…そして、私達の戦いは、これから始まる…。

「さあ！ さっきのお客様はもう帰ったわ！ 急いで次の葬式の準備に取り掛かりなさい！」

責任者である私の号令が、式場にこだまする。

それと同時に、ウチの有能なスタッフ達は、各自それぞれの持ち場に散っていった。

あるグループは、会場をぐるりと一周する紅白の横断幕を床に下ろし、急いで裏返しにかかる。

わが社特注の、紅白と白黒の、リバーシブルの横断幕だ。特注リバーシブルなのは、金屏風も例外ではない。

光り輝く金色の裏には、ただ無機質な白色が広がっていて、どちらにも、裏返せばすぐにでも会場のムードを祝福から弔いへと変えることのできるシロモノだ。

どの業界においても企業の生き残り競争が激しいこの時代、利益率の高い結婚式と、数ある葬式とを同時にこなすことが出来るという事が、わが社の金儲けの武器なのだ。

また、あるグループは、披露宴の料理の片付けに追われている。ほとんど手のつけられていないバセリ等には、そのまま葬式後の料理を彩ってもらう。

多少料理に違和感が生じるだろうが、そこは当社シェフの腕の見せ所といったところだろう。

あるグループは、結婚式用のカーペットを丸めて片付け、葬式にふさわしい冷たいタイル張りの床が姿を現すようにしている。さらに、この会場に漂っている料理や化粧のにおいを誤魔化すために、数本の線香を焚いている。

これで雰囲気は立派な葬式会場だ。

「ほらほら！ あと30分だよ！ 仕上げに入って！」

それぞれの持ち場の仕事片片付いたスタッフ達は全員、テキパキとタイル張りの床にパイプ椅子を並べてゆく。

つい先ほどまで新郎新婦が使っていた長机は、今は献花台として正面に配置されている。

ウエディングケーキが乗っていた台には、花に彩られた老人の遺影が鎮座している。

「こつちは準備終わりましたよ。会場の方は、そろそろ終わりですか？」

そう背後から話しかけられて振り返ると、そこには一人の坊主がいた。上下を法衣に身を包んだその姿は、どこからどうみても一人の坊主であった。

そしてこの坊主は、さっきまで神父の服装で一組の新郎新婦を祝福していた。

「あら、お色直しはもう済んだのかしら？」

「ははは、君、いつまでも結婚式気分ではないといけないよ。もうすぐここは葬式場になるのだからね。それにしても、君はそのままの服装で良いのかい？」

「私は表には出ませんからね。ただ、営業スマイルを沈痛な面持ちに変えれば良いことですわ。」

そう言って私は順調に準備を進める会場を後にし、いち早く会場入りした遺族の控え室へ行った。

先ほどまでの結婚式用の祝福の笑みとは全く正反対の、沈痛な面持ちで控え室に入る。

「お悔やみ申し上げます。」

そう言いながら、私は葬式後に控えるもう一つの結婚式の段取りを考えていた。

鳳凰堂

「お母ちゃん！」

夏の暑さも過ぎ去り、涼しい夜風の心地よいある夜、料理屋のおかみ、おつたが高熱に倒れた。

「おりん、太一郎、お母ちゃんのこととは心配しなくて大丈夫だから、ちやんとお父ちゃんのこと手伝つてあげるのよ。」

次の日から、おりんは接客係、太一郎は包丁人として店を手伝った。どんなに眠くてもどんなに疲れていても、ふたりはおつたのかわりに精一杯働いた。しかし、二日たつても三日たつても回復の兆しは見えない。

そんなある日、隣町から簡屋の一行が食事にやって来た。おりんが、父と太一郎が丹精込めて作った料理を盆にのせ、ふすまを開けようとしたとき、中から簡屋の旦那の声が聞こえた。

「裏山の奥深くには大判小判が眠っているらしいな。ひとたびそれを手に入ればどんな願いでも叶うそうだ。」

翌朝、おりんと太一郎は裏山へ走った。何十段、何百段とある階段を無我夢中で駆けのぼった。上った先には小さな広場があった。

「お兄ちゃん見て。今あそこで何か光った！」

広場の奥の草むらで何かが光っている。草をかき分け進んでいくと、そこには先が見えないほどたくさんの鳥居が迫りくるように並んでいた。

ふたりは何十も何百もあると思われる鳥居のトンネルを足も止めずにくぐっていった。途中、何度か下駄が脱げた。どんどんどんどん駆け抜けたその先には、鳥居と同じ真っ赤な色の大きな御殿があった。鳳凰のように立ちはだかるその御殿の中に、二人は恐るおそる足を踏み入れていった。中に入ると金銀の装飾、天井には龍。その部屋を中心に大きな鼓が置いてある。ふたりは鼓に駆け寄りそつとその蓋を開けた。すると中からまばゆいほどの光があふれ、箱いっぱいの大判小判があらわれた。

喜んでそれを手に取ったおりんと太一郎：しかし次の瞬間、二人の影は消えていた。静まり返る部屋。そこには小判が二枚仲良く転がっていた。数日後、おつたの熱が下がり容体はすつとよくなった。だがしかし、ふたりの子供に会える日は、来ない。

金蠅襲来！

―研究所を全速力で駆け抜ける二人の男。CちゃんとU斗だ。Cちゃんは叫んでいる。

「なんだありやあ！全長二メートル近いあの化け物は…！巨大な…」

「金蠅だよ、Cちゃん！全身金色に光ってるから間違いない！」

「U斗！蠅はお前の研究分野だろうが！」―時々手伝ったね。

「突然変異でも起こした実験体が逃げ出したのかな？あーあ、保健所がうるさいんだよねえ」

「科学者倫理は蟬の抜け殻じゃねえぞ！就職と同時に置き去りにすんな！」

「うーん、蠅の卵に放射能浴びせたのはまずかったかなあ」―そんなことしてたの！？

「お前は科学者じゃねえ！お前なんか『蚊がつぶれた音』で十分だ！」

―Cちゃんの比喩は、時々分かりにくい。たぶん、「蚊がクシャ」だと思う。

「どわあ！」「うわあ…」―二人は再び金蠅に遭遇した。

―六本の足、二枚の羽根…紛れもない、蠅。ただし、とてつもなくでかい。しかも金色。

「と、とりあえず、モニタールームに逃げよう！あそこはクジラ襲来にも耐えられる構造に…」

―U斗の言葉を待たず、蠅が飛び立ち二人に襲いかかる…かに見えたが、巨大金蠅は二人の頭上を抜け、扉の前に陣取る。モニタールームの扉だ。「あ」―二人は再び全力で逃げる。

「つーかお前はK助と機械工学科に行ったんじゃないのかよ！大学の自己紹介で、将来の夢はドラえもんを作ることです、って言ってただろ！なぜに蠅の研究！？」

「機械は飽きちゃってねえ。そっちはK助に任せることにして、院からは蠅に鞍替えしたの」

「このちくわ野郎！！」―たぶん、芯が通ってないという意味。

「それにK助は！？今日は研究所の取材も兼ねて三人で同窓会するっていうから来たんだぞ！」

「今日は見てないなあ。しかし懐かしいね。僕とCちゃんとK助の、大学での活躍…」

「記憶を改竄すんな！活躍したのはお前らだけで、俺はブレーキ役！物理で言うならfだ！」

「Cちゃん、居眠りしてる学長のズラ外して、大目玉食ってたよね」

「それをやったのはお前だろ！放置されたズラを俺が戻そうとしたら、学長が起きたんだ！」

「Cちゃんがズラ外した決定的瞬間を、K助は激写した！」―シャッター音で学長は起きた。

「畜生！どうしてお前らみたいなのが研究所に行けて、俺だけフリーライターなんだ！」

「K助はいたずらっ子だけど、天才だからねえ。学長のハゲ写真は今でもあいつの宝物だよ」

「あれのせいで俺は危うく退学になるところだった！不公平だ！」

―その時二人は金蠅と三度目の対面を果たした。それは羽音を轟かせ、瞬間移動にしか見えない速度で二人に襲いかかる。「はえーっ」―一つの悲鳴の重なりによって「カシャ…カシャ」という音はかき消された。うん、そろそろ潮時―

K助はモニターから目を離し、軽く体を伸ばす。

「―かな。ま、いたずらは、恨みを残さず後味すっきりが鉄則だからね。二人の写真も撮られたし、種明かししようかな。でも、さっきのモニタールームは危なかったな。僕がいるのがばれるとこだった。それにしても、シャッター音や金メッキの塗装―僕の専攻ぐらい知ってるんだから、あれが僕の作品だって、気付いてもよさそうもんだけど…」

金こそ全てだ？

『世の中、金が全てだ』

っていうけどさ、まんざらでもないよね。

だって、そういう人の友達は、お金なくなっちゃったらどうかいっちゃうもん。

確にお金じゃ愛は買えない。でもお金がなかったらデートはできない。

なんかよくわからないや。

一番大切なものは家族・友人・自分です。

って、きれいごとだよ。

でも、もし家族が人質にとられて身代金何億円も請求されたら家族を救う道を選ぶと思うんだ。

たとえばそれで家や土地を失ったとしてもね。

…なんか矛盾だね。

まあ要するに、4千円と友情だったら4千円をとるけど十億円と友情だったら友情をとるってことだよ。

地球人観察記　『お金編』

「で、地球人における『金』とはどういう存在なんだ？」

地球人観察の旅から帰ってきた僕に、上司は早速聞いてきた。今回の僕の使命は地球にしか存在しない「お金」について調べる事。僕達の星にはそんなものは存在しないのだ。

「お金と引き換えに欲しいものを手に入れる、というのが一般的な使用方法みたいですね。地球人の専門家によれば、お金には物の価値を表す尺度となる、取引をスムーズに行うのを助ける、物の価値を貯蔵する、という3つの機能があるようです。僕には難しくてちよつと分からないんですけど」

「こんな簡単に破れてしまう紙切れに、それだけの能力があるのか？」

僕がサンプルとして持ち出した一枚のお金のご真ん中に、彼は自慢の尖った爪を突き刺したかと思うと、一瞬で粉々に破いてしまった。僕もあんな芸ができれば良いなあ。

「まあ宇宙は広いですからね。大切だと思う物は人それぞれでしょう。ただ地球人にとってはその紙切れの貴重さ故にトラブルが絶えないそうです。果ては戦争まで起こるらしいですよ」

「戦争だと？　馬鹿馬鹿しい。それなら今の俺の行為を見れば地球人は発狂するだろうな」

彼は牙をむき出していつもの嫌らしい笑みを浮かべている。まあ僕達の星では生活必需品から嗜好品、娯楽品に至るまで、地球に比べればかなり楽に手に入る。だから物を人に譲るのに見返りを求めたりはしないし、求めるにしても物々交換で間に合ってしまう。価値観がずれてしまうのは仕方無い。

「つまり、地球人にとって一番大事なものは金なの

か？」

どうだろう…僕は尻尾を振りながら彼の質問の答えを探した。

「…一番ではないと思います。お金がいっぱいあっても豪華な館に住んでいるのに、心を病んでいる人がいました。逆にお金がなくて貧しい生活をしているのに笑顔が絶えない家族もありました。お金と幸せは必ずしも比例するわけではないのかもしれませんが」

彼の期待した答えを出せたかどうか分からないけれど、とりあえず僕はそう答えた。彼はしばらく考えたとで言った。

「まあ結論を言うと、我々には金なんてややこしい制度は導入できないってことだな。何はともあれ苦労だった」

彼のそつけない言い方に僕は哑然とした。

「じゃ、じゃあ僕は何のために地球に行ったんですか。地球人に変身して偵察までしたのに」

「お前は我々の目的を忘れたのか？　地球人を観察して、使えそうな制度は我が星にも導入し、使えないものは切り捨てる。今回は後者だったというだけの話だ」

まあ確かに彼の言う通りだ。無理に新しい制度を導入して混乱を招くのも避けたい。しかし僕が地球に行く前とあとで何の変化も起こらないのでは、全くの無駄足ではないか。

僕の不満げな表情を察したのか、彼は苦笑して言った。「分かった分かった。褒美に今朝とれたての肉をやるからそれでいいだろ」

「ありがとうございますー！」

僕は長い舌で大好物の肉を受け取ると口に放り込んだ。やっぱり意味の分からない紙切れよりこんな褒美の方がずっと良い。食意地の張った僕はそう思うのであった。

『RING』

「この部屋も今日で見納めか——」

数十年もの間私の居場所だった研究室、ついにそこを離れることになる。感慨深さは片付けの時存分に味わった。今は、新たな決意に満ちている。

私は今までずっと天文学者の道を歩いてきた。おもに太陽系を中心に研究、観測。研究室に引き籠る時もあれば世界中を飛び回る時もあった。それなりに功績も残せたのでこの歳まで大学に居させてもらった。もう家族のいない私には多すぎるほどの退職金も頂いた。

私は、どうせこのままだと国庫行きになる貯金と退職金を使って、とある国の長閑な田舎町に家を建てた。この先短い人生を終わらせるに相応しい場所として選んだだけではなく、もう一つの目的があった。

突然だが、『日食』という年に二、三度ほどの周期で起こる現象で、皆既日食を除けばそれほど珍しいものでもない。実際私は日食の観測に外国へ出向いたことなど一度や二度ではない。ところが、観測の度に天候、交通路の不具合、その他さまざまな要因により日食の中で一度も目にしたことがないものがあった。確率が低いはずの皆既日食ではない。

それが『金環食』である。

今年の終わり この村で金環食が観測できる。私がここに来た本当の目的だった。

引越しが終わり、テラスの椅子に腰かける。七十年以上前の図鑑 子供のころ夢中になっていた図鑑を取り出してぼんやり眺めた。そこには色褪せてなお美しい金環食の写真。

「死ぬのが先か 日食が先か」

引越して半年 私の一日はテラスで椅子に揺られて過ごす時間が大半を占めるようになった。日食を観測する特等席で 昼は農耕や園芸に励む村人たちを眺め 夜は今まで追い続けてきた星空を眺める。

「……」

気づいたら椅子の上で転寝してしまつたようだ。ということはまだ生きている。……そろそろあの日も近い。間に合うか？ 合わないか？

私はとうとう椅子から動かなくなった。

太陽はそんな私の時間などお構いなしに昇っては沈み、月に隠されるその刻を待っている。村は世界から時を切り離れたかのように変わらない風景を留めている。その風景は少しずつ霞んで、白い光を帯びていく。私の視界は少しずつ白に染まっていく。それを妨害するかのように、風景は影を帯びた。日食が始まった。私の顔は脳が命令しなくとも自然に太陽を向いていた。

視界を侵食する二つの力 その中で私には欠けてゆく光だけをずっと見つめていた。視界は光の幾何学模様 それはコマ送りのように不連続で 少しずつ 光は欠けてゆく。外周だけを残して光が隠され、『RING』の姿を象ろうとする。

私の視線の先にあったのは どんな写真でも どんな映像でも見たことのない 不思議な金色のリング

そのリングは そっと私のもとに降りてきて 私を包み込んだ

次の瞬間 ふっと体が浮いた リングが空へ連れて行ってくれるのか 私を包み込んだまま 金色のリングは

一点が指輪に填められたダイヤモンドのように輝く 最後の姿を見せた そのダイヤモンドの光に 私の視界は 音もなく静かに弾けた

ロンドンの薄汚い路地裏に血の匂いが漂っている。何かを恐れるように立ちすくむ娼婦の前には、首がザックリと切れた男が転がっていた。

「ああ……私はまた一人、人を殺してしまった」

ロンドンの殺人鬼

人を殺すというのは、とてもリスクがある上にあまり利点のない行為だ。誰かに見られたら罪人として追われてしまうし、いつも怯えて暮らすことになる。そのくせ人を殺したからといって、いいことはあまりない。殺人そのものを楽しめるなら別であるが。だから私は、殺す相手をよく選んでいる。金を持っていて、その金を私に使わない人が理想だ。

そんなことを考えながら、男の上着から財布を見つけた。高級娼館から出てきた男だけあって、かなりの金額が入っていた。五千ポンドはありそうな札束を自分のポケットに入れ、財布は元あった場所に戻す。そうして私は、誰にも見つからないよう祈りながらその場を離れた。

男を殺した場所から離れるといくら気が楽になった。いつからか、人を殺すことよりも捕まることを恐れるようになった。私は、人を殺すことに慣れてきている。

「しょうがないのよ」

自分に言い聞かせるように呟く。そう、しょうがない。私には金が必要なのだ。それも莫大な金だ。

私には一人だけ娘がいる。娼婦なんてやっていけるものだから誰が父親かはわからないが、私は娘をととても可愛がった。しかし娘は難病にかかり、日に日に瘦せ衰え、このままでは命にかかわるという。しかし私には娘に手術を受けさせる金なんてなかった。

この世は金が全て。金がなければ生きていけない。私は金を得るためだったらなんでもやった。他人の家に忍び込んだし、金を持っていそうな人

を何人も殺した。そして今は、この体を売るために男に声をかけ続ける。しばらくして、私は今夜の相手を得た。

私は人気がない路地裏につれてこられた。外でするのはあまり好きじゃないけど、相場より高い金で買われただけに文句は言えない。笑顔を作って男を抱きしめた。そのまま唇を合わせ、舌を入れる。男の手が私の体に伸びてきた。また憂鬱でいて悦ばしい一時が始まる。そう思った瞬間、お腹に鋭い痛みを感じた。

視線を下に移すと、白い服は真っ赤に染まっていた。

「——え？」

「すまないねえ」

肩、胸、脚、脇腹、首。次々と、体のあちこちが切られていった。いつの間にか口には布が詰められていて声を出すことができない。痛みを感じている間にも、ナイフが私に襲い掛かる。ようやく危険だと気づいて逃げようとしたけど転んでしまった。なぜか男の足元には私の左脚が転がっている。

「大丈夫かい、お嬢さん。アハ、アハハハ、アハハハハハ」

男は笑いながら私に跨がり、どんどん体を刺して、切って、切り刻む。グサッ。痛い。グサッ。痛い痛い痛い。グサッ。痛い痛い痛い痛い痛い！逃れようと必死に抵抗した。ポケットから札束がこぼれ出る。その札束は、血に塗れて赤くなっていた。大切なお金。愛しい娘を救うために必要なお金。あと少しだったのに。ギュッと札束を握りしめると、娘の顔が思い浮かんだ。その想いを断ち切るかのようにナイフが叩きつけられ、札束を握ったまま手首が飛んでいった。

「すまないねえ、アハハハハハハハハハハ！」

思い出した。ロンドンには今、二人の殺人鬼がいる。一人は金を求め続ける哀れな私。もう一人は、殺人を楽しみ殺人に生きる本物の殺人鬼。ロンドンに住む全ての人に恐れられる彼によって、私は殺されバラバラになるだろう。

彼の名はそう、切り裂きジャック。

地獄の沙汰も

「どうしても金がほしい」

「だめです」

「ちよつと借りるだけだから」

「だめです」

「じゃあどうしよう、

『時は金なり』っていうだろう。君、時間がほしいと思わないか？」

「まあ、思うこともありますね・・・」

「一分あげようじゃないか。いい話だと思わんかね！」

「・・・二分ならいいですよ」

「二分！私にそんな時間は残されてないんだよ！」

「じゃあ諦めてください」

「うーん。この状況をなんていうか知ってる？」

「なんですか？」

『頭打ち』っていうんだよ」

「うまいこと言ったつもりですか？早く打ってください」

「じゃあこんなのはどうか。『一“角”千金』という言葉があつてだな・・・」

「田辺竜王、十回目の考慮時間に入りました。残り時間は・・・」

「はあ、あと金一枚で詰むんだが・・・」

スクワズ ノゾケバ

黒く汚れた橙色のシート。
滑らかな円柱型の金属棒の骨格。そこから垂れる裸電球。
裸電球は金属を冷たく輝かせ、後頭部を熱く照らす。

視界が揺らぐ。

白い光が妖しく揺れる。

刃。無数の、光を纏った刃が空間を満たしている。
ゆらり。

白い刃が踊る。

瞬間、無数の刃が顔面を切り裂いた。

二重、

三重、

四重……、

幾重にも。

切り裂き、

切り刻み、

更に削り取る。

際限なき斬撃に、赤いものが溢れた。

溢れ、

零れ、

広がり、

どす黒いものが覗く。

赤の中で黒が蠢いている。

歪な形。

歪な黒。

黒い肉。

——皮膚は削がれ、筋肉が露になる。

赤く染まった骨が、それでもなお白く存在を主張する。

しかし削られる。

僅かに残された肉が、骨ごと削り取られる。

そして、グニヤリと、ワラウ。

肉片と化したはずの、

原型など留めようも無いソレが、ワラウ。

断続的な肉の塊が、

赤と黒と白とで彩られたソレが、

あなを覗き返す。

水面に反射した光は撫でるように顔面を斑に照らしていた。

水槽の中には赤の群れが鮮やかに犇めき、その赤に紛れるように黒が醜く踊る。

水面にうねる白い光がそれらを気促に覆い隠していた。

コンテスト結果				
コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
まじょコメント				
01	金色の別れ	3 pt	7 位	2 sp
		金色の葉っぱを愛でるのではなく「颜色が悪い」とたとえた発想の転換がナイス！ 思いを残しつつ地に還ってゆく葉っぱたちの思いにしみじみ同調できる秋☆ロマンティックな表紙でした。 特別賞：フレディで賞か？ from Fledy班（班員に言われてました） また来年会いましょう from I love money班		
02	冠婚葬祭奮闘物語	9 pt	2 位	1 sp
		結婚式とお葬式。似て非なる……あ、でもたしかに似てる。義理で出る単なるセレモニーってところが。そんな意外だけれど実はナットクな組み合わせを、うまくウラオモテにしてドタバタと遊んでいただきました。 ユニークさが評価されてのシルバーメダルです、おめでとう！ 特別賞：商売繁賞 from 銀行班（こんなところでは挙げたくない） イチオシフレーズ：「ウェディングケーキが乗っていた台には、花に彩られた老人の遺影が鎮座している」		
03	鳳凰堂	0 pt	10 位	0 sp
		ポーン。そこは「つづみ」じゃなくって「つづら」だと思っただけだなあ。 そこだけ疑問。あとはしっとり浸れました。そうか小判って、そんな悲しい産物だったんだ、こわっ、とちょっとホラーめくのも昔話テイストの王道で良かったです。		
04	金蠅襲来！	6 pt	3 位	0 sp
		学生時代と変わらない悪ガキ3人組。そんな仲の良さが大騒動のさなかもしっかり伝わってきて安心して笑えます。 学生時代に培った友情は、こうしていつも同窓会をできるところが良さ。 若者たちよ、青春の今をたいせつに……なんてね。ブロンズメダルとともに、狙い通り（たぶん）のイチオシフレーズ大賞です、おめでとう!! イチオシフレーズ：「蚊がクシャ」×3 「このちくわ野郎!!」 「はえーっ」		
05	金こそ全てだ？	3 pt	7 位	0 sp
		友だちトークの気さくな味わい。つらつらと考えているうちに、ある結論に行き着くという率直さがいいですね。 イチオシフレーズ：「世の中金が全てだ」×2 「まあ要するに4千円と友情だったら4千円をとるけど、十億円と友情だったら友情をとるってことだよ」		
		4 pt	4 位	0 sp

06	地球人観察記 ～お金編～	尾っぽふりふりなんていう情景の見せ方がとても楽しかった。ただ、異邦人の目でお金を見るとという設定が生かし切れていないような。これなら正統派でまっすぐ書いても同じなのでは。 ここはぜひ、ちょっと見で、トンデモ勘違いをしたこの「犬人」さんたちが、ヘンテコなお金制度を取り入れちゃったなんていう展開へグレードアップを。それでこそフィクション仕立てにした甲斐があるというもの。			
07	RING	<table><tr><td>3 pt</td><td>7 位</td><td>2 sp</td></tr></table> 金環食からダイヤモンドリングへ。とてもうつくしい「昇天」のシーンです。 生涯かけて愛し抜いた宇宙のもとへ還るのですね。「もう家族のいない私」とか、いろいろ裏設定もありそんな厚みのあるストーリーでした。 特別賞：なんだかすごくねむいんで賞 from Cash班（フランダースの犬みたい ルーベンスの絵を見て死にたい） 叙情賞 from 蠅班（最期の滲み方が叙情的）	3 pt	7 位	2 sp
3 pt	7 位	2 sp			
08	ロンドンの殺人鬼	<table><tr><td>4 pt</td><td>4 位</td><td>3 sp</td></tr></table> 娘のために、という「正義」が殺すことが楽しいという快楽殺人に負けるまで。 それは自業自得なのか、それともやっぱり悲劇なのか。底に深い問いをはらんだそんな構成が、ナマナマしい描写のうまさとともに、しっかり全体の骨格になっていると読みました。 自重しましょうと言われつつ、気づけば最多特別賞です、おめでとう！ 特別賞：自重しま賞 from Billionaire班（作者の顔が目にかぶ） 先手必賞 from Gold班（殺られる前に殺る） 因果応報で賞（人殺しが殺される、そんなもんですね）	4 pt	4 位	3 sp
4 pt	4 位	3 sp			
09	地獄の沙汰も	<table><tr><td>24 pt</td><td>1 位</td><td>1 sp</td></tr></table> おー、まさにうまいこと言った！ コントの台本にこのまま行けそうですね。ありえないほどの圧勝でした。おめでとう金の回の価値あるゴールドメダル!! そうですか耐震偽装（前期「銀」の回）の作者さんですか、あの作品は水戸で高校の先生方を集めて模擬コラムラウンドをやったときに、みごと一等賞でしたよ。ぱちぱちぱち。 特別賞：ト金を手に入れま賞 from GELD班（そんなに金が欲しいなら敵陣につっこめ！そしてト金を手に入れろ！ 傷つき泥にまみれてなお前に進む者であれ！	24 pt	1 位	1 sp
24 pt	1 位	1 sp			
10	スクワズノゾケバ	<table><tr><td>4 pt</td><td>4 位</td><td>1 sp</td></tr></table> わあお、金魚すくいだと気づけるまでに3分間。ちょっと分かりにくかったか。選考シートを見る限り、気づいた班は4/10だった模様。 でも、気づいてみれば、この視点の転換はスゴい！なるほど波が刃という見立てかと観察力の鋭さに感じ入りました。 特別賞：頑張って重ねました賞 from 79Au班（たぶんテキストボックスを使ったんでしょう） イチオシフレーズ：「あなた＋わたし」	4 pt	4 位	1 sp
4 pt	4 位	1 sp			

